

実践報告

小学校における演劇ワークショップの実践

青柳 達也* ・ 辻 恵子* ・ 中島 頌一郎* ・ 後藤 峰彦* ・ 角 和博**

Theater Workshop in Elementary Schools

Tatsuya AOYAGI*, Keiko TSUJI*, Shoichiro NAKASHIMA*,
Minehiko GOTO* and Kazuhiro SUMI**

【要約】

2011年9月に発足した演劇教育団体「さがユースシアター」は、佐賀県文化・スポーツ部まなび課の「文化体験・鑑賞教室」の一環として、平成24～25年度に佐賀県内の小学校において演劇ワークショップを実施している。

【キーワード】

演劇教育, 表現教育, コミュニケーション教育, ワークショップ

1. はじめに

アメリカでは、今年で100年目を迎える全米コミュニケーション学会 (National Communication Association) ⁱ⁾ の存在からわかるように、コミュニケーション能力の育成に関して長年実践されてきている。これは、アメリカは日本と違い、様々な人種や民族背景の国民が集まっており、お互いに違った価値観や考え方をもっていることが前提としてコミュニケーションをとることが求められているゆえに、コミュニケーション教育が必然的に発展してきたと言える。

一方、日本では今まではある一程度の同様の価値観や考え方を持った人が集まっており、「空気を読む」「場を察する」などの暗黙の了解を前提としたコミュニケーションが存在してきた。しかし近年、少子高齢化や高度情報化などの影響により、小学生の子ども達のコミュニケーション能力育成に関して変化が見られるようになった。日本では、そもそもコミュニケーション能力というのは、遊びなどの体験を通じて自然に育まれてきたが、「少子化や地域社会の変化があり、コミュニケーション教育について学校で取り組まざるを得なくなった」ⁱⁱ⁾ と言える。

様々な小学生のコミュニケーション能力の育成の取組の中で、効果的な手法の一つと言えるのは演劇を活用したワークショップである。本報告は、平成24年度から25年度にわたり、「さがユースシアター」が実践した演劇ワークショップの実践事例を紹介し、演劇を活用した手法が佐賀県内だけでなく日本国内で幅広く展開することに寄与することを目的とする。

2. さがユースシアターについて

2011年9月に、北九州芸術劇場にて開催された、(財) 地域創造によるリージョナルシアター事業に (財) 佐賀市文化振興財団と佐賀で活動する演劇人4名 (青柳達也, 辻恵子, 中島頌一郎, 後藤峰彦) で参加し、演劇を用いた地域交流プログラム作成の為の研修を受け、これをきっかけで演劇ワークショップチーム「さがユースシアター」が発足する。2012年2月には (財) 佐賀市文化振興財団主催により、佐賀市文化会館にて「演劇あそびまなぶ～佐賀に広まれ! 演劇のチカラ」戯曲リーディングワークショップ, 表現教育プログラムワークショップ, パネルディスカッション「アートと人と教育」を実施し、同年5月には青少年のため

*さがユースシアター

**佐賀大学文化教育学部

の演劇スクール「さがユースシアター」開講し、定期的に子ども達に演劇を教える団体として活動をスタートする。

「さがユースシアター」は、学校や家庭ではない場所で演劇体験を通じて、子ども達が「自分らしくイキイキと生きていくこと」を目的として活動をしている。年齢により2コースに分かれており（表1：「さがユースシアター」概要）、年に1度発表公演を開催しており、2013年4月に第1回発表公演「出会いの一步」（於：アバンセホール）、2014年1月に第2回公演「奏でる想い」（於：アバンセホール）を開催している。

表1 「さがユースシアター」概要

コース	対象	内容
表現	小学生	表現遊びや演劇ゲームを通じて、自分の考えや気持ちを言葉にすることや身体で表現すること、友達や仲間と協力することを学ぶことを目的とする。体と言葉での自己表現力を高める場であり、他者との繋がり・コミュニケーションを体験・学習する活動となる。
演劇	中高生	演劇作品を創るプロセスの中で、失敗や間違いを恐れることなく自分のアイデアを表現することや、お互いを認め合うことを学ぶことを目的とする。自分らしさを見つける場であり、演じることの奥深さを体験するだけでなく、自分に対する自信に繋がる活動となる。

「さがユースシアター」が考える「演劇で学ぶ生きる力」の中には、言葉と身体によるコミュニケーション能力・表現力だけではなく、自信・自己肯定感や社会性、想像力・創造力を育むことを

意図している。このような活動は現状では都心に集中的に発展している傾向があり、（財）地域創造がリージョナルシアター事業を「演劇というツールで地域に何ができるか考える機会」ⁱⁱⁱ⁾と掲げているように、ますますこれから地域での取組が重要視されており、「さがユースシアター」は佐賀県内での重要な担い手となっている。

3. 佐賀県文化スポーツ部まなび課文化体験・鑑賞事業について

「さがユースシアター」の実績を踏まえて2012年9月からは、佐賀県文化・スポーツ部まなび課主催による文化体験・鑑賞教室として「子どもたちが文化芸術に親しみ、興味をもってもらうきっかけづくりとして、県内の文化団体や音楽家などを県内の小・中学校、高等学校及び特別支援学校に派遣し、公演などを行ってもらおう」^{iv)}ことを目的とし、佐賀県内の小学校を訪問し演劇ワークショップを実践し、継続的に次年度も開催されている。実施概要を表2に示す。

表2 演劇ワークショップ実施概要

日時	学校	学年	人数
2012/9/27	唐津市立玉島小学校	3, 4	24
2012/9/27	多久市立南部小学校	4, 5, 6	50
2012/11/21	嬉野市立五町田小学校	3	31
2012/11/22	佐賀市立諸富南小学校	4	49
2012/11/29	唐津市立呼子小学校	4	34
2013/10/22	唐津市立久里小学校	4, 5, 6	40
2013/11/5	唐津市立大良小学校	全校	23

各学校で実施される内容は、参加人数や学年、子ども達のワークショップに取り組む姿勢により変化するが、一般的なメニューを表3に示す。

表3 演劇ワークショップ内容（順不同）

名称	内容
うさぎ、 あひる、 ぞう	<p>学習目的：身体表現を学ぶ、恥ずかしさをなくす。</p> <p>学習内容：円になり、オニが一人真ん中に出る。オニは、ある一人に「ウサギ」というと、その人はウサギの耳を手でつくり、左右の人は足をつくる。「アヒル」というと、その人はくちばしを手でつくり、左右の人は羽根を手でつくる。「ゾウ」というと、その人は鼻を手でつくり、左右の人は耳を手でつくる。オニは誰かが間違ったり遅れたりすると、「アウト」と言って交代する。</p> <p>説明：ゲーム感覚がある活動により、自然に身体を動かすことに慣れる。身体で表現することの恥ずかしさを失くすことができる。</p>
身体しりとり	<p>学習目的：身体表現を学ぶ、相手に身体で伝える難しさを体験する。</p> <p>学習内容：3～4人組になり、身体でしりとりをする。一人がある言葉を身体で表現し、もう一人はそれが解いたら言葉であてる。3～4人の中で、繰り返し実施していく。同じ言葉は二回使ってはならない。「ん」で終わらないようにする。</p> <p>説明：身体だけで何かを伝えることは難しいが、伝わること達成感がある。また、相手の人が上手に表現しているのを見ることで、学びがあり、自分でも同じように実践してみようと思うことができる。</p>
わたしあなた	<p>学習目的：アイスブレイクをする、アイコンタクトに慣れる、緊張感をほぐす。</p> <p>学習内容：自分のことを言うときは「わたし」、そして相手を指して「あなた」ということをリレーのように</p>

	<p>回して行く。だんだんとペースを早くしていく。</p> <p>説明：アイコンタクトをとることと人前で言葉を発することに慣れる。</p>
拍手回し	<p>学習目的：グループの連帯感をつくる、アイコンタクトに慣れる。</p> <p>学習内容：隣の人と向き合って、相手の目を見て一緒にタイミングで拍手をする。そして、次の人と向き合って同じことをする。リレーのように回していき、だんだんとスピードを早くしていく。</p> <p>説明：単純な動作を一緒にやることで、グループの連帯感がうまれてくる。スピードを早くしていくと、グループのリズムができてきて、それを保とうとしたり崩れたりすることで笑いがでる。楽しい雰囲気がでてくる。</p>
じゃんけんゲーム	<p>学習目的：アイスブレイクをする、二人組での活動に慣れる、お互いを知る。</p> <p>学習内容：①左手を身体の前に出し、お互い右手でじゃんけんをして、勝った方は負けた方の左手を握ることができる。負けた方は握られないように手を引く。</p> <p>②次は、①と同じ要領で手を変えて、左手でじゃんけん、右手を握る・握られないように手を引く。</p> <p>説明：ゲーム感覚で意識しないで相手と触れ合うことができる。お互いに親近感がでてくる。</p>
1・2・3	<p>学習目的：二人組での活動に慣れる、協力することを学ぶ、信頼関係をつくる。</p> <p>学習内容：</p> <p>①「1・2・3」を交互に言う。</p> <p>②次は、①の要領で「2」の場合、手を叩く。</p>

	<p>③さらに①②の要領で「3」の場合、足踏みする。</p> <p>④一組ずつ参加者の前で①～③までを見せあう。</p> <p>説明：少し難しいけど可能な作業を行うことで、二人組で協力することを体験する。最終的に、お互いに見せ合うことで発表をすることに慣れる。</p>
イエス、アンド	<p>学習目的：相手や相手が言うことを受け入れる、想像力を広げる。</p> <p>学習内容：嘘でもありえないことでもいいので、「あなたは〇〇です」と右隣の1人に伝える。言われた人は言われた事をそのまま「わたしは〇〇です」と復唱し、そして次の右隣の人に自分で考えたことで「あなたは〇〇です」と伝えていく。次は、「あなたは〇〇です」といわれ、「わたしは〇〇です」と復唱した後「△△な〇〇です」と付け加える。</p> <p>説明：周りにいる人達はそれぞれに違った考えやアイデアを持っていて、それをまず受け入れることで、新たな可能性が出てくることを体験する。自分の言ったことを受け入れてもらえることで、自分の考えやアイデアを発することの自信につながる。</p>
何やっているの？	<p>学習目的：身体と言葉の表現を学ぶ、想像力を広げる。</p> <p>学習内容：3～5人グループにわかれる。一人がある動作をする。そして、隣の人がその人に「何やっているの？」と聞く。動作をしている人は、その動作を続けながら、やっている動作とは違うことを、例えば「掃除しているの」と言う。その言われた内容の動作を「何やっているの」と聞いた人はやる。次の人が同じこと繰り返す。バリエーションとして、答え</p>

	<p>る時に、感情を付け加える。例えば「悲しそうに掃除しているの」と言われたら、その通りに悲しそうに掃除をする。</p> <p>説明：即興的に相手に言われたことを受け入れて、すぐに身体で反応することは、あまり考えずに自分の直感を頼ることになる。頭で考えすぎなくても、対応できることを学ぶ。</p>
私は木です	<p>学習目的：身体と言葉の表現を学ぶ、想像力を広げる。</p> <p>学習内容：4～6人のグループに分かれる。ある一人が「私は木です」と言いながら身体で木のポーズをつくる。次々に思いついた順番で次の人が、付け加えることができるものを作っていく。例えば「私は木の下にあるベンチです」などと言いながら、その形を身体でつくる。作る内容は、人間でも、動物でも、自然のものでも何でもかまわない。全員、入りきったら、最初に入った人が「私は〇〇を残します」と言って、その〇〇の人だけ残す。残された人は、再び「私は〇〇です」と言って、前回とは違った内容のものを始める。</p> <p>説明：周りの人がやっている内容を見て感じて、自分がどんな役目で入っていったのかを判断する。何をやっても受け入れてくれることを体験することで、自信や信頼関係につながる。</p>

それぞれのメニューには、違う学びの要素が含まれているが、どのメニューをどの順番で用いるかは、ワークショップを運営するファシリテーターにより、その瞬間に参加者に求められているものや有効的なものが何かを判断される。これは演劇ワークショップにおいて、人間それぞれに表現の方法があることを前提として、決して正しい答え

があるものではないと考えるからである。様々な表現をお互いに受け入れ、限られた時間内で共に形にしていくことが求められるのである。

演劇ワークショップでは演じることを自然にできる環境を作り、毎回ランダムに分けられたグループにより活動をする。その中でグループ内で話し合いをすることや意見を擦り合せるといったコミュニケーションを体験する。単回のワークショップで様々なスキルを獲得できるとは言えないが、コミュニケーションをとることや人と繋がることを楽しいと思う成功体験は、今後の学校生活においてだけではなく、日々の基本的な人間関係の構築にも役立てられよう。

演劇ワークショップ実施後のアンケートでは、「楽しかった」「またやってほしい」というコメントが多い傾向にあった。参加した全生徒が表現やコミュニケーションに対して自信があるわけではなく、中には「私は、劇とかはあまり上手ではないので、やりたくないなああとちょっと思っていたのですが、やってみるとすごく楽しくて、2時間あった時間もあっという間に過ぎて、またやりたいと思いました。でも、まだはずかしいという気持ちもあるけど、今度チャンスがある時は、はずかしがらずに参加できると思います。」というコメントもあった。このように子ども達に印象に残る体験となっていおり、演劇ワークショップが「きっかけ」づくりとなっていると言える。

4. まとめ

演劇はどこでも誰でもできるものである。音楽や美術などの分野とは違い、演劇は道具も必要とされず、身体だけで様々なレベルで体験できるものであり、最も気軽に参加できるものであると言える。だが、欧米諸国とは違いまだ日本ではハードルが高く身近な存在として確立されておらず、教育現場に一般的には導入されていない現状にある。特に都心から離れた地域での取組は細々としている。

しかし、「さがユースシアター」での実践から感じ取れるのは、演劇教育が現場でも受け入れられ、求められる可能性があるということである。

子ども達にコミュニケーション能力や表現力を求めない学校はないと言え、新しい効果的な手法として演劇は活用できるという成功事例と結果を、「さがユースシアター」は残している。

佐賀県のような自治体が文化体験・鑑賞教室を開催しているのは、演劇だけに限らず、文化活動に触れることの重要性が求められている。子ども達の明るい未来を創造するのは、学校も自治体も「さがユースシアター」も同様であり、それを達成するための演劇の役割は大きいと言え、今後の発展に期待できよう。

【主要引用・参考文献】

i) 全米コミュニケーション学会(National Communication Association)は今年で99年を迎えるコミュニケーション学の多くの分野をカバーするアメリカの代表的な学会である。

(<http://www.natcom.org/>)

ii) 平田オリザ (2012) 学びの場.com教育インタビュー「コミュニケーション教育を語る。～演劇はどの子にも居場所を作り、意欲や自信を持たせる効力があります。」(アクセス:2013年9月30日)

iii) (財)地域創造リージョナルシアター事業 (2012)

<http://www.jafra.or.jp/j/guide/independent/play05/index.php> (アクセス:2014年1月13日)

iv) 佐賀県文化・スポーツ部まなび課文化体験・鑑賞教室 (2012)

http://www.pref.saga.lg.jp/web/kankou/manabi/_74563/_66142.html (アクセス:2014年1月14日)